



## 宇部興産株式会社

2020 年度第 3 四半期決算説明会

2021 年 2 月 2 日

## イベント概要

---

[企業名]	宇部興産株式会社
[企業 ID]	4208
[イベント言語]	JPN
[イベント種類]	決算説明会
[イベント名]	2020 年度第 3 四半期決算説明会
[決算期]	2020 年度 第 3 四半期
[日程]	2021 年 2 月 2 日
[時間]	18:00 – 18:48 (合計：48 分、登壇：22 分、質疑応答：26 分)
[開催場所]	電話会議
[会場面積]	
[出席人数]	79 名
[登壇者]	1 名 取締役 常務執行役員 CFO 藤井 正幸 (以下、藤井)

## 登壇

---

**司会：**投資家の皆様、こんばんは。本日はお忙しい中、宇部興産株式会社の電話会議にご参加いただきまして、ありがとうございます。

これより、取締役常務執行役員 CFO、藤井正幸より、2020 年度第 3 四半期連結決算について約 20 分間ご説明申し上げたあと、質疑応答を行います。会議全体の時間は 45 分を予定しております。

電話会議を始めます前に、皆様にお断り申し上げます。これから行う説明におきまして、現時点での予想にもとづく将来の見通しを述べる場合がございますが、それらは全て、リスクならびに不確実性を伴っています。皆様には、実際の結果が見通しと異なる場合があることをあらかじめご了承ください。

それでは、決算説明を開始いたします。藤井常務、よろしくお願いいたします。

**藤井：**みなさん、こんばんは。宇部興産の藤井でございます。お忙しいところをご参加いただきまして、ありがとうございます。

では、早速ですが、本日発表いたしました 2020 年度第 3 四半期連結決算につきまして、資料に沿ってご説明をいたします。よろしくお願いいたします。

## 連結対象会社

項目	2019年度末 (A)	2020年度 第3四半期末 (B)	増減 (B) - (A)	摘要
連結 子会社数	69社	66社	△3社	+ Premium Composite Technology North America, Inc. - U-MHIプラテック株式会社 - U-MHI PLATECH AMERICA, INC. - 安逸達電解液技術（張家港）有限公司 - 宇部アンモニア工業有限公司
持分法 適用会社数	26社	26社	0社	+ MUアイオニックソリューションズ株式会社 - 常熟宇菱電池材料有限公司
計	95社	92社	△3社	

3

資料の右下にページ番号が振ってございます。まず3ページのスライド、連結対象会社の異動のところでございます。連結子会社数、数の上では3社減で66社、実際には1社増、4社減です。

右の適用欄に社名が記載してあります。増えた1社、Premium Composite Technology North America、これは北米のコンパウンド会社を買収したものでございまして、第1四半期に連結に入ったものです。

それから、その次の減ですが、U-MHI プラテック、U-MHI PLATECH AMERICA、この2件につきましては、射出成形機の事業、三菱重工さんとの合弁体制でしたが、これを宇部興産機械に吸収合併いたしましたので、第2四半期に連結から外れました。

その下の安逸達電解液技術（張家港）有限公司、これは中国の電解液の会社でございまして、当初、当社が100%でやっておった時の会社でございしますが、清算が終了しましたので連結から外れました。これも第2四半期です。

それから、最後の宇部アンモニア工業です。これが第3四半期に連結から外れました。当社にこの会社の事業全部吸収いたしましたので、連結から外れたということでございます。

続いて、持分法の適用会社数です。数の上では26社変わらずですが、1社増、1社減という内訳です。増加したのは、MU アイオニックソリューションズ株式会社。こちらは電解液の事業をこの下期から三菱ケミカルさんとの合併体制に移行しまして、当社20%の出資で持分法の適用会社に入ってくるようになります。

その下の常熟宇菱電池材料有限公司、こちらは中国の電解液をもともと三菱ケミカルさんと50、50で行っていた会社ですが、今般のその上にありますMU アイオニックソリューションズの100%子会社になるため、当社の持分法からは外れます。

いずれの異動も連結業績への影響は軽微でございます。

2020年度 第3四半期連結決算   
**環境要因**

項目			2019年度 第3四半期 (A)	2020年度 第3四半期 (B)	差異 (B) - (A)	
為替レート		円/\$	108.7	106.1	△ 2.6	
資材 価格	ナフサ	CIF	\$/ t	533	365	△ 168
		国産	円/KL	42,300	28,900	△ 13,400
	ベンゼン (ACP)		\$/ t	653	487	△ 166
	豪州炭 (CIF)		\$/ t	101.5	77.3	△ 24.3
			円/t	11,030	8,198	△ 2,832

4

続いて、4ページのスライド、環境要因です。

為替レート、第3四半期、やや円高で推移しております。累積期間で見ても、やや円高に推移してございます。

それから、資材価格でございます。ナフサ、ベンゼン、石炭、それぞれ昨年度同期間と比べますと、かなり価格が下がった状態で推移してございます。ただ、第3四半期3カ月で見ますと、第2四半期からは上昇している水準でございます。

## 主要項目

(単位：億円)

項目	2019年度 第3四半期 (A)	2020年度 第3四半期 (B)	差異 (B) - (A)	増減率
売上高	4,978	4,389	△ 589	△ 11.8%
営業利益	254	138	△ 115	△ 45.6%
経常利益	249	105	△ 143	△ 57.6%
親会社株主に帰属する 四半期純利益	151	89	△ 62	△ 40.9%

5

続いて、5 ページのスライドです。主要項目でパツとした概要でございますが、全体像としましては減収減益という決算になっています。

売上高は、終わった第3四半期実績値で4,389億円、前年同期に比べますと589億円の減収、率にして11.8%の減収になります。それから、営業利益、138億円ということで、同じく前年同期比で115億円の減益、率にしますと45.6%の減益。

経常利益ですけれども、実績値が105億円、前年対比で143億円の減益、率にして57.6%。親会社株主に帰属する四半期純利益、実績値89億円、前年同期比で62億円の減益、率にして40.9%の減益という結果でございます。

今年度、上期におきまして、コロナの影響、特に化学、機械等で大きく受けたところと、化学はアンモニアの定修年でもありましたので、対前年度では上期の悪化の影響が大きく出ているような状況になっております。

ちなみに、第3四半期、10月から12月の第3四半期3カ月だけを見ますと、売上高は若干減収ではありますが、利益は増益に転じて、回復基調では推移しているところでございます。

## セグメント別 売上高/営業利益

(単位：億円)

	セグメント	2019年度 第3四半期 (A)	2020年度 第3四半期 (B)	差 異 (B) - (A)	増減率
売上高	化学	2,149	1,797	△ 352	△ 16.4%
	建設資材	2,277	2,123	△ 153	△ 6.7%
	機械	647	545	△ 101	△ 15.7%
	その他	35	23	△ 12	△ 35.3%
	調整額	△ 130	△ 100	30	-
	計	4,978	4,389	△ 589	△ 11.8%
営業利益	化学	110	15	△ 95	△ 85.7%
	建設資材	113	110	△ 2	△ 2.6%
	機械	29	10	△ 18	△ 63.7%
	その他	4	3	△ 1	△ 34.7%
	調整額	△ 4	△ 1	2	-
	計	254	138	△ 115	△ 45.6%

6

続いて6ページのスライド。売上高、営業利益のセグメント別の内訳をお示ししております。

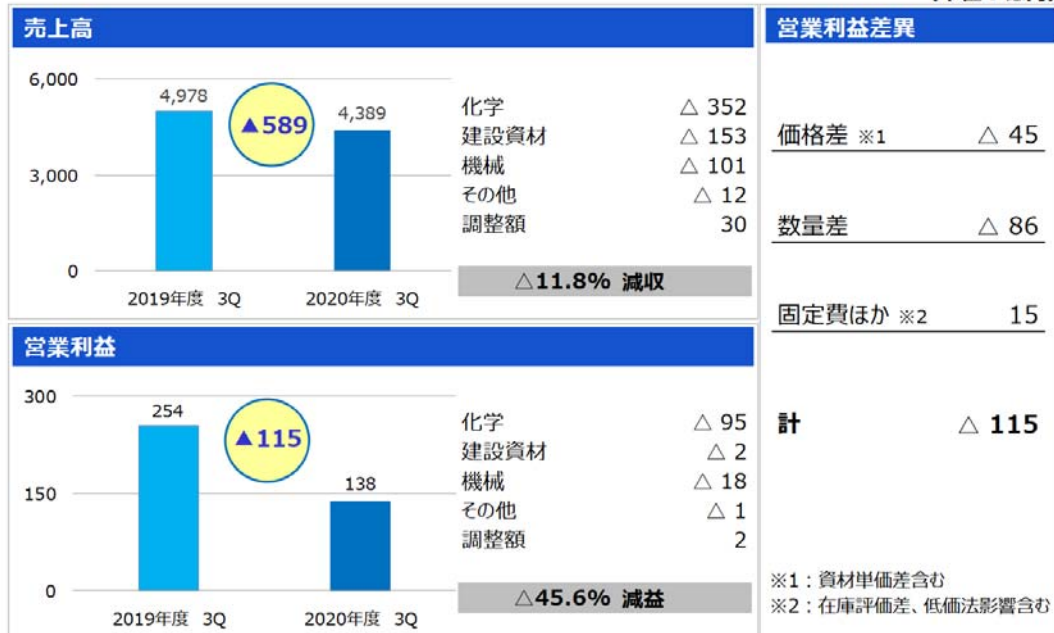
まず、売上高です。全体として、前年同期に比べると589億円の減収と申し上げました。化学、建設資材、機械、それぞれ減収でございますが、化学が352億円の減収、建設資材が153億円の減収、機械が101億円の減収です。

右のほうに増減率が書いてございますが、建設資材は比較的、減収の率としては小さめになっています。建設資材部門は、コロナの影響が比較的限定的であったというのが見てとれると思っております。

その下の営業利益でございますけれども、トータルとしては前年同期比で115億円の減益でございます。大きいのはやはり、化学の95億円の減益というところ。建設資材に関しては、2億円の減益ですから、まあほぼ前年同期に近い水準になっているところ。それから、機械が18億円の減益。化学、機械で特に上半期、コロナウイルスの影響を大きく受けたところでございます。

## 差異分析 全社

(単位：億円)



7

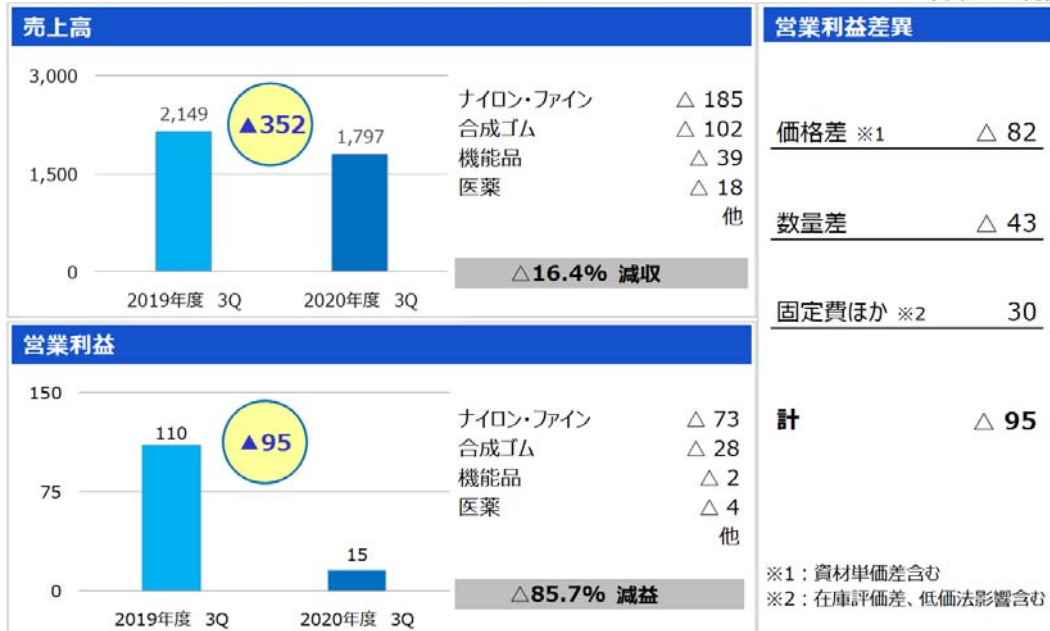
続きまして、7 ページのスライドです。全社の差異分析です。

セグメントごとの内訳、今、前のページでお示した通りでございます。右のほうの営業利益の差異の内訳で、価格差として 45 億円のマイナス、数量差で 86 億円のマイナス、固定費ほかでプラスの 15 億円の改善要因があり、トータルとしては 115 億円の減益となっております。



## 差異分析 化学

(単位：億円)



8

その下、8 ページのスライドからセグメント別のご説明になります。

まずは、化学のセグメントです。

売上高 352 億円の減収でしたが、サブセグメントの内訳、そこにお示ししている通りでございます。それぞれのサブセグメントともに減収です。

大きかったのはナイロン・ファイン、それから合成ゴムといったところ。ナイロン、ラクタムのところ、やはりコロナの影響を大きく受けまして、価格が下がっている影響が大きいところ。それから、工業薬品は定修がありましたので数量減の影響がありますし、ファインケミカルもやはり、価格、数量ともに、コロナの影響を受けて減収になっております。

それから、合成ゴムで 102 億円の減収です。こちらもやはり、価格要因が大きいところでして、原料のブタジエンが大きく値下がりして、それに追随して製品価格のほうも下がっている、といったところ です。

それから、機能品では 39 億円の減収です。こちらもポリイミドは増収でしたが、それ以外の機能品の製品、それぞれやはり需要の減退で減収になっています。それから、医薬が 18 億円の減収。こちらもお荷量が減少しているところでございます。

その下の営業利益ですけれども、化学全体としては95億円の減益ですが、内訳はその右をご覧ください。ただいています通りです。もっぱら大きいのはやはりナイロン・ファインのところ。ナイロン、ラクタム、こちらが価格も下がっていますが、スプレッドのほうが非常に圧縮をされているところの影響です。

合成ゴムにつきましても、こちらもやはりスプレッドの影響が大きいところ。原料価格以上に製品価格が値下がりをしているといった状況が、特に上期ですけれども、発生している。

それから、機能品で2億円の減益になっています。ポリイミドは増益になりましたが、それ以外の製品、売上のところでも申しましたが、ポリイミド以外の機能品も需要減退により、数量減の影響が出ているところ。

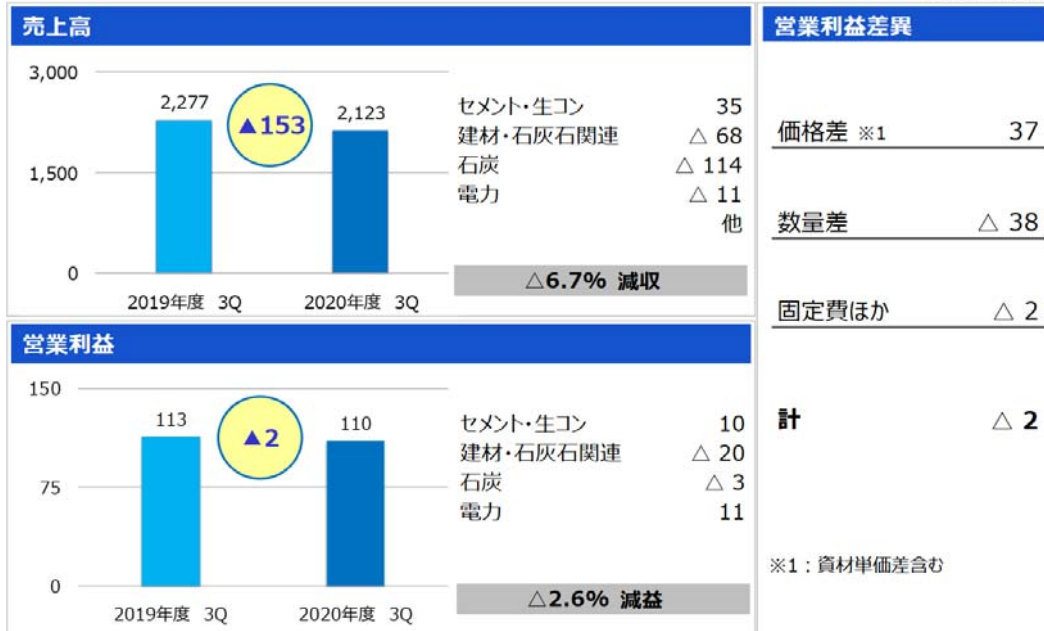
医薬につきましては4億円の減益。こちら売上でも申しましたように出荷の減少といったところ。医薬につきましては、出荷のタイミングによってぶれることがございますが、対前年でも出荷は減少していました。

営業利益の差異、右のほう、価格差、数量差で見ますと、価格差として82億円の減益です。こちらのもっぱらナイロン、ラクタム、合成ゴム、こういったところのスプレッドの悪化部分がきいているところ。それから、数量差43億円のマイナス要因ということですが、こちらの数量差はポリイミド以外の機能品、こういったところの製品がやはり数量的にはマイナスの影響、それぞれ少しずつ出ているといったところ。

その他固定費ほかで、プラスの30億円の増益を担っております。こちらの米印の2で、在庫の評価差、低価法の影響を含むということです。これらで大体20億円ぐらいのプラス要因になっております。それ以外のところで10億円ぐらいのプラス要因ということです。合わせて95億円の減益です。

## 差異分析 建設資材

(単位：億円)



9

続いて9ページのスライドです。建設資材部門です。

売上高 153 億円の減収ですが、内訳ご覧いただけますように、一番大きいのは石炭のマイナス 114 億円です。石炭につきましては、価格が大きく下がっておりますので、この価格影響。それからあと、数量も販売炭・預り炭とも若干減っておりますので、そういった数量要因も含まれております。

それから、もう一つは建材・石灰石関連の子会社の宇部マテリアルズが行っております石灰石製品、カルシア、マグネシア等です。こちらの売上が需要減退に伴いまして、売上減というところではあります。

電力につきましては、石炭価格が下がっておりますので、ベース価格が下がったことでの売上減です。

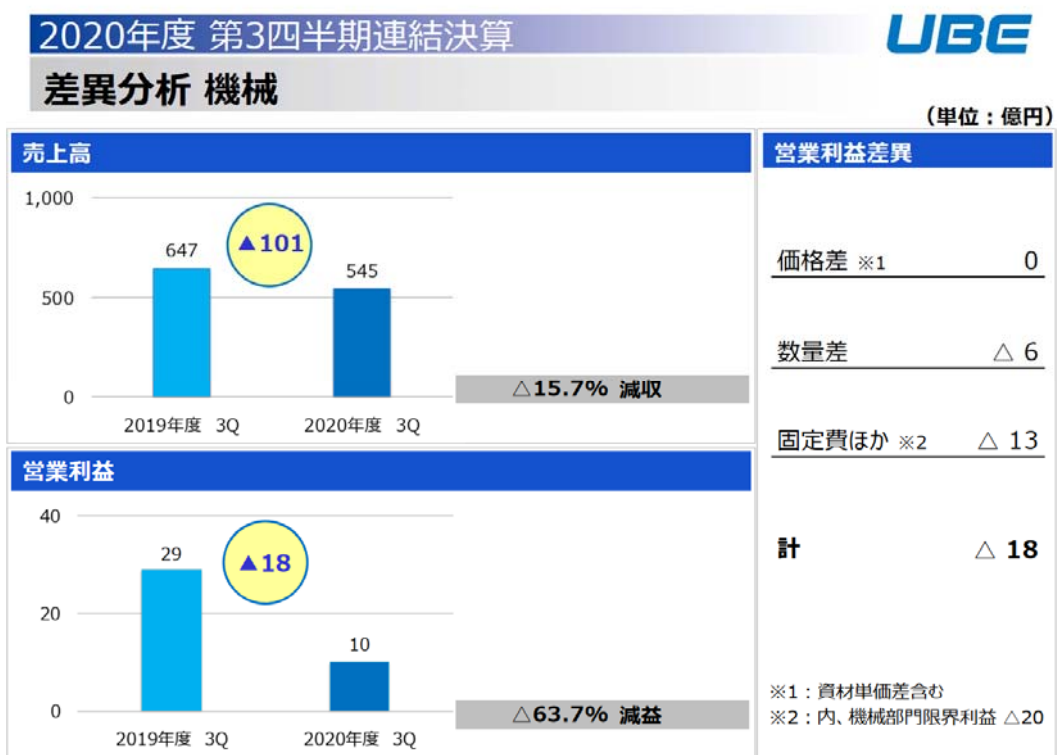
一方、セメント・生コンのところでは 35 億円ほど増加になっております。実際にはそのセメントと生コンの製造販売では、それほど大きな売上増になっているわけではございません。今回、建設資材の関係の商社機能のところでは、グループ会社の再編が行われました。その影響で商社機能のところでのプラスが発生したということで、損益的にはこの部分はあまり大きく響いておりません。

営業利益ですが、対前年で2億円の減益です。内訳はご覧の通り、セメント・生コンではプラスの10億円です。これは石炭価格下がっておりますので、そのコストダウンの効果があったところ。

建材・石灰石関連につきましては、売上で申し上げたように、宇部マテリアルズのカルシア、マグネシア等、こういった需要減によるマイナスの20億円。それから石炭は価格が下がって、数量が下がっておりますけれども、損益影響はそれほど大きなものではありません。

電力につきましては、原料の石炭が下がっているところと、IPPが今年度は定修がない年でございます。そういったコスト面のプラス要因が入っております。

価格差、数量差等で見ますと、価格差はプラスの37億円。こちら、石炭の価格が下がったことによるところが大きいです。一方の数量差でマイナスの38億円ですが、こちらは宇部マテリアルズの石灰石製品、こちらの需要減に伴う数量減が大きなところ。あとは固定費ほかではマイナスの2億円で、トータルすると2億円の減益という結果になっております。



10

続いて10ページ、機械部門です。

売上高 101 億円減収でございます。こちらにつきましては、やはりコロナの影響を受けました成形機がもっぱらマイナス要因としては大きいところ。その他、製鋼品、こちらの鑄造品の需要減の影響。こういったところがマイナス要因として効いています。

それから、営業利益として 18 億円の減益です。こちらも売上同様ですが、影響として大きいのは成形機の出荷減によるマイナス。それから製鋼品の需要減のところ。産機についてはプラス要因ということで増収増益になっておりますが、成形機、製鋼品のマイナスが大きくなるといったところではあります。

それから、価格差、数量差のところ、こちらは製鋼品だけになります。価格差ほとんどありません。数量差のところでのマイナス 6 億円。それから固定費ほかのところは機械のほうの限界利益の影響が出ております。米印の 2 番で下のほうにございますが、機械部門の限界利益として 20 億円ほど対前年で悪化している。この影響が大きく出ているところでございます。

## 2020年度 第3四半期連結決算



### 営業利益～四半期純利益

(単位：億円)

項目	2019年度 第3四半期 (A)	2020年度 第3四半期 (B)	差異 (B) - (A)
<b>営業利益</b>	<b>254</b>	<b>138</b>	<b>△ 115</b>
<b>営業外損益</b>	<b>△ 4</b>	<b>△ 32</b>	<b>△ 27</b>
金融収支	5	1	△ 4
持分法投資損益	18	4	△ 14
為替差損益	1	△ 8	△ 10
その他	△ 30	△ 29	0
<b>経常利益</b>	<b>249</b>	<b>105</b>	<b>△ 143</b>
<b>特別損益</b>	<b>△ 55</b>	<b>15</b>	<b>71</b>
<b>税金等調整前四半期純利益</b>	<b>193</b>	<b>121</b>	<b>△ 71</b>
<b>法人税等・非支配株主利益</b>	<b>△ 41</b>	<b>△ 31</b>	<b>9</b>
<b>親会社株主に帰属する四半期純利益</b>	<b>151</b>	<b>89</b>	<b>△ 62</b>
<b>1株当たり四半期純利益</b>	<b>150.16円</b>	<b>88.73円</b>	<b>△ 61.43円</b>

11

続いて、11 ページのスライドです。営業外損益、特別損益等です。

営業外損益としては、この第 3 四半期、実績値はマイナスの 32 億円でした。前の期と比べますと、27 億円ほど悪化をしております。内訳ここにお示ししておりますが、持分法投資損益、こ

らは持分法の会社につきましても、やはり業績が悪化してきておりますので、そちらでの取り込みが減少しているところ。それからあと為替差損益で少し悪くなっております。こちらは第3四半期円高で振れた影響が出ているところです。

それから、その下に特別損益の欄がございます。終わった第3四半期までの実績値がプラスの15億円。これに対して前年同期比がマイナスの55億円で、差としてはプラスの71億円良くなったかたちになっております。昨年度につきましては、ゴルフ場の事業譲渡を決めましたので、これに伴いまして、減損損失46億円を計上しているといった影響がございます。

一方で、今年度ですけれども、この下期から電解液の事業を再編しました。これに伴いまして、一過性の持分変動利益が出ております。これの計上等がございました。そういったプラスマイナスの差し引きで見ると、71億円ほど改善したかたちになってございます。

こうしたところで下から二番目にありますように、親会社株主に帰属する四半期純利益89億円で着地をしているところです。

## 2020年度 第3四半期連結決算



### 貸借対照表

(単位：億円)

項目		2019年度末 (A)	2020年度 第3四半期末 (B)	差異 (B) - (A)
資 産	流動資産	3,039	3,179	139
	固定資産	4,231	4,239	8
	合計	7,272	7,420	148
負 債	有利子負債	1,907	2,239	331
	その他負債	1,821	1,599	△ 221
		3,728	3,838	110
純 資 産	自己資本 *1	3,323	3,370	46
	非支配株主持分他	220	211	△ 8
	計	3,544	3,582	38
負債・純資産合計		7,272	7,420	148

\*1:「自己資本」…純資産から新株予約権と非支配株主持分を除外したもの

12

続いて、12ページのスライドです。バランスシートに関してでございます。



総資産 7,420 億円で、前年度末、3 月末に比べると若干増加はしております。負債でございますが、有利子負債が 331 億円ほど増加して、残高として 2,239 億円になっております。社債の発行もしておりますが、やはり新型コロナの影響も懸念されて、手元の現預金を厚めにキープしております。そういったところで資産のほう、流動資産も少し増えておりますし、有利子負債も増加しているところでございます。

それから、純資産の自己資本ですけれども、第 3 四半期末 3,370 億円で、前期末から比べると 46 億円ほど増加したかたちになっております。中間配当も実施しておりますが、その差し引いた上で 46 億円の上積みをしている状況でございます。

## 2020年度 第3四半期連結決算 キャッシュ・フロー計算書

UBE

(単位：億円)

項目	2019年度 第3四半期	2020年度 第3四半期	
A.営業活動によるCF	461	386	税金等調整前四半期純利益 121 減価償却費 271 運転資金の増減 120 法人税等の支払 △70 他
B.投資活動によるCF	△ 310	△ 325	有形・無形固定資産の取得 △307 他
フリー・キャッシュ・フロー (A+B)	150	60	
C.財務活動によるCF	△ 182	202	有利子負債の増減 297 配当金の支払 △93 他
D.現金及び現金同等物の増減 (含、換算差額等)	△ 29	272	
E.現金及び現金同等物の四半期末残高	293	678	

13

続いて、13 ページのスライド、キャッシュ・フローに関してです。

営業活動によるキャッシュ・フロー。この第 3 四半期までで 386 億円のキャッシュ創出。一方で投資活動によるキャッシュ・フローは 325 億円のキャッシュ・アウト。差し引きしますと、フリー・キャッシュ・フローが 60 億円でございます。

財務活動によるキャッシュ・フロー。こちらは有利子負債を厚めにちょっとキープをしておりますので、202 億円。配当を支払った後で 202 億円のキャッシュ・インというかたちになっておりまし

て、一番下、現金及び現金同等物の四半期末残高、こちら 678 億円で、申しあげましたように、厚めに確保して推移をしている状況でございます。

第 3 四半期の連結決算の概要は以上でございます。

通期の業績予想ですが、こちらは昨年 10 月 23 日に発表しております、業績予想から変更はございません。

配当予想につきましても、年間 1 株当たり 90 円という従来予想を据え置きとさせていただいております。私からのご説明は以上です。



## 質疑応答

---

**司会：**ありがとうございました。それでは、これから質疑応答に入ります。

これより、ご質問の仕方についてご説明いたします。ご質問の順番が来て司会者よりお名前を呼ばれましたら、会社名、お名前の後にご質問をお願いいたします。なお、ご質問につきましては一問一答形式をお願いいたします。また、多くの方からのご質問にお答えするために、お一人様1回につき2問まででよろしくお願いいたします。

それでは、質疑応答をお願いいたします。

では、まず最初に、A証券株式会社のA様、ご質問をお願いいたします。

**A：**A証券、Aでございます。どうぞよろしくお願いいたします。

**藤井：**よろしく申し上げます。

**A：**一つ目は、化学ですけれども、数量差のところ、ポリイミド以外の機能品の数量が減少したのが主なマイナス43億円の内訳だというお話でしたが、機能品の売上高は39億円の減少になっているので、他の事業部は、数量差が少ないのかということを確認させてください。

また、機能品の第3四半期および第4四半期の見通しについて、主だったところ、変化があるところだけで結構ですので状況を教えてください。これが一つ目です。

**藤井：**まず、数量差のところ申しますと、先ほど、ポリイミド以外の機能品がこの数量差の要因であると申し上げました。ナイロン、ラクタム、この辺りも数量としてはそれほど前年同期と比べて大きな減少にはなっていません。こちらは減産等の影響は大きいものがございますので、その辺りはある程度価格対応もしながらということで、数量確保した面もあるかと思えます。ですので、数字として出てきているのは機能品のほうが主に出てきている状況でございます。

それから、機能品に関して、今後の見方等々でございますけれども、基本的にはポリイミドですが、これまでのところフィルムはCOF用途、あるいはFPC用途ともに好調に推移をしてきております。それからあとは、ワニスにつきましても、コロナ影響による世界的なスマホの販売減で、第2四半期、調整局面ございましたけれど、そこから回復基調に向かっているところでございます。

ですので、今後につきましても、フィルム関係、大きく事業環境には変化はないだろうと見ております。ワニスに関しましては、その辺りのスマホの回復というところで、1段さらに増加を期待したいと思っているところです。

一方で、米中関係をベースにしました Huawei の規制の関係、こういった影響はまだ継続しております。ただ、影響は限定的と見ているところです。

それから、電池材料ですけれども、電解液はこの下期から三菱ケミカルさんとの合弁体制に移って、連結の売上、営業利益からは外れるといった形になるところです。セパレーターのほう、こちら数量は回復基調で推移をしております。ですので、今後も第4四半期も需要は堅調に回復拡大といった形で推移していくと見ております。

一方で、半導体不足で自動車関係、生産に影響がというところがございますので、この辺りは少し懸念材料かなと見ているところです。その他の機能品、分離膜とかセラミックスとか、それほど規模は大きくないですけれども、コロナの影響等、結構需要減退影響を受けたところではございますけれども、航空機関係以外のところは徐々に回復傾向が継続すると見ているところです。

**A:** 上期の段階では、合成ゴムも数量差のマイナスが大きかったと思うのですが、第3四半期では需要が自動車の回復に伴って戻ってきたので、そこまでマイナスになっていないということでしょうか。

**藤井:** 合成ゴムにつきましては、第3四半期、特に国内のタイヤ向けの数量がかなり回復をしてきたところがございます。ですので、数量はかなりもう戻ってきている。

ただ、原料のブタジエンが昨年来下がってきていて、昨年の7月をボトムにして、そこから急騰してきたというところがございます。第3四半期、そういった原料が高くなって、製品価格が追いついていないところで、スプレッドが圧迫をされている局面がございました。

ですので、第4四半期につきましては、数量については大体堅調に推移していくと見ておりますし、今、足元では昨年末ぐらいからブタジエンの価格が下がってきております。そういった意味では、第4四半期、スプレッドで回復が期待できると見ているところです。

**A:** 総じて、お話を伺っていると第3から第4は、ある程度伸びそうだという理解でよろしいですね。

**藤井:** 機能品、それから合成ゴム等につきましては、そういったところです。ナイロン・ファインのところ、こちら需要は堅調に回復基調で、これは続いていくと見ているのですが、供給側で懸念が出てきています。

どういふことかと言いますと、宇部のアンモニアプラントで配管の設備の不具合が発生しまして、先週、1月25日からアンモニアの設備は今一時停止をしております。アンモニアはご存知の通り、ラクタム、ナイロン、ファインとか、こういった製品の上流工程にあたりますので、こういったところの生産に影響が出てくる可能性があるところなんです。とにかくお客様への影響を最小限にとどめるように、鋭意調整をさせていただいているところが現状になっております。

これの復旧の見通しにつきまして、現時点でまだ明確にというところではありませんけれども、まだ後2~3週間ぐらいはかかるかというところがございます。業績影響につきまして、現時点では、はっきりとは見えていない状況ではございます。マイナス要因として十数億円程度にはなりそうかというイメージを持っているところ。はっきりとしたところではございませんけれども、そういう状況が起こっておりますので、とにかく早急に復旧をさせ、影響を最小化しよう。これに全力を挙げていこうというところがございます。

ですから、ナイロン・ファインのところ、チェーンとしまして、需要は戻っているところではございますけれども、そういった供給サイド、生産側のところでマイナス要因が発生しそうだということがございます。

**A:** 今のお話について一つだけ確認させてください。日本でのラクタム事業ですが、アンモニアがない状態でも、アンモニアを他から調達してきてラクタムを作って売ることができるのか、それともそれは厳しいのかを教えてください。

もし、日本でラクタムが作れないのなら、タイから持ってくることは可能なのでしょうか。その辺も含めてお願いします。以上です。

**藤井:** 原料の外部調達等含めて、今いろんな施策を、手を尽くしているところがございますので、そういった可能性もどんどんと検討しながら、そういう影響を最小限に抑えるという形で対応を取っていく方針でございます。

**A:** 分かりました。ありがとうございます。

**藤井:** ありがとうございます。

**司会:** ありがとうございます。次に、B証券株式会社、B様、ご質問お願いします。

**B:** ありがとうございます。B証券、Bです。よろしく願いいたします。

**藤井:** よろしく願いいたします。

**B:** 頂いた資料の 19 ページと 20 ページを合わせて見ておまして、2Q から 3Q にかけての利益の変化という点について確認をさせていただきます。

まず 1 点目は、化学セグメントのところの機能品ですけれども、こちらは QonQ で売上が 3 億円増、一方で、利益は 4 億円増となっております。機能品の売上に関しては、電解液の売上が恐らくクォーターで推定ですけども、十数億円ぐらいなくなったので、これを足し戻してあげると実質的には十数億円売上高が増えていて、それによって利益が 4 億円ぐらい増えているとなります。大体そういう見方でよろしいのでしょうか。

**藤井:** この第 2 四半期から第 3 四半期にかけての差異というところで見ますと、ご理解の通り、電解液が外れたことでの減少。一方で、セパレーターですとか、セラミックス等は増加しているところ。ポリイミド、分離膜はほぼ同じぐらいの水準ですので、ご理解の通りで結構かと思えます。

**B:** ポリイミドは 2Q、3Q はフラットだったんですか。

**藤井:** 売上はフラットです。利益は若干増になっております。売上がほぼフラットと申しますのは、中身の構成差等がございますので、そういったところの影響です。

**B:** なるほど。利益が上がったというのは、どっちかと言うとワニスが伸びたという感じなんですか。

**藤井:** 数量的にはフィルムもワニスもそうではございますけれども、ワニスの比率のほうが大きいというところでは。

**B:** ありがとうございます。補足ですけれども、セパレーターのところは、少し価格競争も厳しいということで、従来からすると少し投資のスタンスが慎重になったように思うんですけども。ここにきて EV の話とか、日本においても電動化という話が聞かれるようになってきていますので、それを受けてもうちょっと強気にやろうという話が、御社として出てきていますでしょうか。

**藤井:** セパレーターに関しましては、マーケットそのものはかなり大きく拡大していくという見通しがあるかと思えますけれども、やはりマーケットとして中国の市場、この辺りの価格競争が非常に激化しているところ。数量が確保できても利益貢献があまりないといった傾向もございますので、われわれとしてはあまり中国マーケットの価格競争のところには追随せずに、われわれの製品の性能とか品質を評価していただける、そういったところをターゲットにしております。

そのわれわれがターゲットにする中で、しっかりと伸ばしていこうということでございますので、ボリュームですとか、そういったところの伸びのスピード感といいますか、そういったところから

するとマーケット全体に比べると、少し緩やかになるかもしれませんが、われわれとしては、このセパレーターの事業をしっかりと成長させていこうというところは、従来から変わっていません。

**B**：ありがとうございます。2点目ですが、同じく20ページ目のところで、建設資材ですけれども、こちら、主にQonQで言うと、セメント・生コンの増加といったところが効いていますけれども、宇部マテリアルズさんでやっていらっしゃる自動車関係の伸びは、2Qと3Qにかけてはあまりなかったのでしょうか。解説をお願いいたします。

**藤井**：第2四半期から第3四半期にかけての建設資材の増加のところですが、この建材・石灰石関連で、利益のところ、20ページです。建材・石灰石関連でプラスの4億円が出ております。

宇部マテリアルズがやっております電材、自動車向けのファイン製品といったところ、こういったところは回復しておりますし、鉄鋼向けも動き始めてきたところ。ただ、耐火物向けのマグネシアクリンカーなどはまだ回復が緩やかといった状況でございます。ですので、宇部マテの製品の需要の回復、こういったところ、数量の伸び等はこの2Qから3Qへの増加の要因の中に入っているところでございます。

**B**：かしこまりました。以上でございます。ありがとうございました。

**藤井**：ありがとうございます。

**司会**：ありがとうございました。次に、C証券、C様、ご質問をお願いいたします。

**C**：C証券、Cです。よろしくお願いいたします。

**藤井**：よろしくお願いいたします。

**C**：1点目ですが、合成ゴムのところをもう一度確認させてください。

先ほど19ページと20ページの表のところで、合成ゴムの売上高はセカンドからサードクォーターにかけて11億増収で、営業利益は10億増益となっています。セカンドクォーターからサードクォーターにかけて、ブタジエンの価格は上がっていると思いますので、もう一度、この局面で売上の伸びと利益の伸びがなぜ同じぐらいになるのかということと、

それを踏まえて、第4四半期、ブタジエン価格が下がるとそのまま増益方向に寄与するという理解で合っているのかどうか、そこをもう一度ご説明いただけますでしょうか。

**藤井**：第2四半期から第3四半期にかけてということで申し上げますと、主に国内の数量が大きく回復したといったところの数量要因が効いております。ですから、売上の増は主には数量増によるところでございます。それがありまして、一方で、価格と言いますか、スプレッドのところ、原料のブタジエン高騰等がありまして、圧縮されている部分がございますけれども、数量増に伴う利益の増加が入ってきている認識でございます。

**C**：そうすると、第3四半期から第4四半期にかけては、原料価格は下がるけれど、製品価格は上がるということもあり得るということでしょうか。多少、期ずれの部分も含めて。

**藤井**：そのこのところのタイムラグはあると思っておりますので、第3四半期までの高騰した原料価格の部分が反映された製品価格になる。一方で、原料価格そのものは下がっている状態ということで、スプレッドは拡大することを期待しているところです。

**C**：それからもう1点、アンモニアの不具合のところも少し補足をお願いしたいのですが。

いつから止まっているのかということと、来年度は定期修理がスキップの年だと思うのですがけれども、今回の不具合を受けて、もう一度定期修理みたいなことがあるのかどうか、その2点、確認させてください。よろしくお願いいたします。

**藤井**：アンモニアの設備は、1月25日、先週の月曜日からストップ、一時停止をしているところです。これを今、早期の再開に向けて、関係各所と連携しながら進めているところでございます。来年度は、定検がない年でございます。

基本的に今回のことがあって、来年定検が必要になるとは思っておりませんが、その辺りはまだ現時点ではっきりと見通せてはいないので、明確なところは今の時点で申し上げることはできません。

**C**：理解できました。ありがとうございます。

**藤井**：ありがとうございます。

**司会**：それでは、そろそろお時間近くになりましたので、次の方のご質問を最後とさせていただきます。D証券株式会社、D様、ご質問をお願いいたします。

**D**：D証券のDです。よろしくお願いいたします。

**藤井**：よろしくお願いいたします。

**D**：御社の3Qの会社計画は元々出されていなかったかと思いますが、3Q決算を終わってみて、御社の想定に対してセグメント別で上振れ、下振れを、可能な範囲で教えていただくことはできますでしょうか。

**藤井**：化学、建設資材、機械というセグメントで申し上げますと、化学部門、想定を若干上回っている推移かなという認識をしております。コロナからの回復が想定よりも少し早まっているといった印象を受けているところです。

それから、建設資材ですけれども、こちら想定を上回った推移と認識しております。通常、第2四半期から第3四半期にかけて季節要因的なものと言いますか、事業特性で売上・利益ともに増えるという傾向はございますけれども、今回は特にその辺りが、例年に比べると増え方が大きくなっているところです。

この辺りの要因は、先ほどの宇部マテリアルズの辺りの増加要因、それから、電力価格がかなり寒波で急騰しておりますので、余剰電力の売電、こちらにメリットとして効いてきている部分もあるところでございます。そういったところで、上振れをしてきているところです。

それから、機械ですけれども、機械はほぼ計画並みの推移かなと。従来やはり、第4四半期といいますか、年度末に出荷が集中するということがございますので、このところをしっかりと計画通り出荷をしていく。これで計画を達成しよう、そういった感触でございます。

**D**：確認ですが、化学のところでは上回ったのは、製品別で言いますとカプロラクタムやポリイミド、この辺でしょうか。あと、建設資材については、少し前倒しの出荷のようなものは出ていないか、この辺、確認させてください。

**藤井**：化学部門につきましては、大体、総じて回復基調で推移しているといったところ。合成ゴムなどは先ほど申しましたように、原料価格とのスプレッドの変動はございますけれども、回復基調というところからすると、やはり全般的に回復をしてきている認識を持っているところでございます。

それから、建設資材につきましては、特に期ずれ要因で大きな要因があるとは認識していません。

**D**：分かりました。そういった中でも通期計画を据え置かれたのは、先ほどのアンモニアのトラブル要因を考慮されてということですか。

**藤井**：そういった懸念材料がございまして、その他にも、世界的にもまだコロナの影響が収まりきっていないところとか、あるいは半導体関係で自動車の生産に影響がというところとか、そういったリスク要因というのもあります。

一方で、建設資材であるとか、あるいは化学のその他の製品等々、回復需要を取り込めるようなところ、プラス要因、期待要因もあるということです、その辺り、プラス、マイナス、トータルしてというところで、現時点ではまだ業績予想は据え置いている状況でございます。

**D**：よく分かりました。ありがとうございました。

**藤井**：ありがとうございます。

**司会**：それでは、終了予定の時間となりましたので、以上で質疑応答を終了させていただきます。

なお、本日お受けできなかったご質問につきましては、明日以降、財務・IR部よりご連絡をさせていただきますので、何卒ご了承くださいますようお願い申し上げます。

最後に、宇部興産株式会社、藤井常務、一言ご挨拶をお願いいたします。

**藤井**：今のご説明、あるいはご質問等にもございましたように、第3四半期の決算につきましては上期の低迷を含んでおりますので、通期業績予想に対する進捗としては、通期に対しては低めな進捗になっておりますけれども、下期だけで見ますと、計画をやや上回る水準で推移していると認識しております。

今後につきましては、まず足元の化学部門のプラントトラブル、これを早期に改修するというところ。それからあとは、他部門を含めまして、需要の回復が続く製品におきまして、しっかりとこれを取り込んでいく。まずは現在の業績予想、これを確実に達成していくことを目指してまいりたいと思っております。

本日はご参加いただきまして、どうもありがとうございました。以上で、説明を終わらせていただきます。

**司会**：以上で、電話会議を終了いたします。ご参加ありがとうございました。

[了]